

会議出席報告書

報告者氏名： 吉田 雄人

会議名：第65回 全国都市問題会議

期間：平成15年10月29日(水)～10月31日(金)

視察都市等及び視察項目：

高山市：「誰にもやさしいまちづくり」について

【タイムスケジュール】

概要：

10月30日

09:30 開会式

09:50 基調講演(東京大学名誉教授 木村尚三郎氏)

11:00 主報告(高山市長 土野 守氏)

12:00 (昼食:会場にて弁当)

13:10 一般報告(NHK 手話ニュースキャスター 丸山浩路氏)

14:20 (休憩)

14:40 一般報告(川西市長 柴生 進氏)

15:50 一般報告(松本大学総合経営学部教授 佐藤博康氏)

17:00 (終了)

10月31日。

09:30 パネルディスカッション

〔コーディネーター〕

ニュースキャスター・かたりすと平野啓子氏

〔パネリスト〕

千葉大学工学部教授

清水忠男氏

早稲田大学教授

卯月盛夫氏

(株)イースクエア代表取締役社長 P.D.ピーダーセン氏

(株)イトーキ Ud&Eoo 研究所

清水 茜氏

三鷹市長

清原慶子氏

呉市長

小笠原臣也氏

12:00 閉会式

12:10 (昼食:会場にて弁当)

<10月30日>

【基調講演】：魅力あるまちづくりをめざして

木村 尚三郎（静岡文化芸術大学学長） 経歴

東京大学文学部西洋史学科卒業。日本女子大学助教授、東京都立大学助教授、東京大学教授等を経て、現在、静岡文化芸術大学学長、東京大学名誉教授。専攻はヨーロッパ史、現代文明論。(財)トヨタ財団理事長に就任。著書に『歴史の発見』、『西欧文明の原像』、『都市文明の源流』、『成熟の時代』など多数。

吉田雄人の会議メモ

伝説がなければ、伝説を作ればよい。

Ex. 石のスープ 旅人がスープを飲むために、皿と石を差し出し、各家を回る。

各家では、石のスープを飲むというから材料を差し出す。

しかし旅人は石を皿に入れてスープを作り、石だけを残す。

そして、「石は勿体無いからこの次に食べる」と言って街を去る。

普通の石の入ったスープが、ご当地の名物となった。

絵葉書や地図など、外部の人間がどう見るかというのが、まちづくりの観点。

所感

何をしゃべっているのか、よく分からない。

ウィーン少年合唱団が変声期とともに団を去るように、言葉に言霊を載せられなくなったら、人前であまりしゃべるべきではない。木村教授の文章や論文を否定したり、人格を批判するわけではないが、「基調」となるような講演ではなかった。

【主報告】：住みよいまちは 行きよいまち

土野 守（高山市市長） 経歴

中央大学第二法学部卒業。自治庁入庁。自治大臣官房企画官、自治大臣官房参事官を歴任。自治省退職後、平成6年から高山市長に就任、現在に至る。

福祉観光都市を目指して、障害者を招いて問題点等を挙げてもらうモニター旅行の実施や、民間施設のバリアフリー化への経費助成など、「安心・安全・快適なバリアフリーのまちづくり」を推進している。

吉田雄人の会議メモ

高山市は合併により、日本一面積の大きい自治体になる。

- ・自然や町並みへの思い
- ・伝統や文化への思い
- ・訪れる人々への思い

訪れる観光客は増えたが、一人あたりの使用金額は下がっている。

修学旅行の誘致をすすめている。一年で762校を実現。より体験型の福祉施設などを増やしていく。

障がい者の観光誘致「モニター旅行」「心のバリアフリーへ」

道路の改修（歩車共存、網ブタの撤去、側溝の利用など）

トイレの改修（トイレマップの整備、オストメイト対応トイレなど）

情報バリアの解消（キオスク端末の設置 手話画像も見られる）

所感

どうしても、施設先行・工事ありきのユニバーサルデザインのような気がしてならない。鍛冶橋交差点の信号機には「弱者押ボタン式」と堂々と書かれていたり、観光ルートから外れる道にはでこぼこやフタの無い側溝があったり、見栄えが先行しているような気がする。

ただ、「心のバリアフリー」という発想は素晴らしいと思った。実際に障がいをもつ方にモニターとなってもらい、観光施策に役立てていこうという姿勢は学ぶべきものがある。

【後日談】

上記の「弱者押ボタン式」などについて、高山市の広報にメールを送信したところ、
以下のような回答を頂いた（2003.11.26）。

貴重なご意見ありがとうございました。

市長まで報告するとともに、関係部署へご意見の内容を連絡したところです。

対応等については、後日ご報告させていただきます。

高山市

企画課 広報広聴担当

【一般報告】：私は生きている 私はなにかが出来る

丸山 浩路（講演パフォーマー）経歴

83年、それまでの心理セラピスト及びカウンセラー、そしてプロの手話通訳者から180度の転身を図り、講演パフォーマーとしてデビュー。以来カルチャーとユーモアにまつまれたトーク、そして感動のエピソード語りで構成された文化講演会やトークショーなどは全国各地で大絶賛を博している。NHK教育テレビ「手話ニュース845」のキャスターとしてもダイナミックにして心温まる手話パフォーマンスで、多くのファンを魅了している。

吉田雄人の会議メモ。

MISSION = VISION + PASSION + DECISION + ACTION

大人が子どもを育てるのではなくて

大人はまちを育て

まちが子どもを育てる。

所感

感動。泣けた。何よりも、言霊を感じた。隣に座っていた青木哲正議員もほぼ同じ感想を持たれたようだ。具体的にどういったアクションをするべき、といった提案があったわけではないが、基本に立ち返らせてくれる講演だった。

ぜひ、横須賀にも来ていただき、話をしていただけばと考えている。

【一般報告】：みんなで作る夢現都市

柴生 進（兵庫県川西市市長） 経歴

大阪学芸大卒業。中学校教員、川西市議会議員、兵庫県議会議員を務めた後、平成2年から川西市長に就任、現在に至る。[わがまちと実感できる夢現都市]を目指し、平成15年度に第4次総合計画をスタートさせた。7月には、交通バリアフリー法に基づき基本構想策定のため、川西市交通バリアフリー重点整備地区計画策定協議会を設置。高齢者や身体障害者等の意見を取り入れた実現性の高い基本構想の策定に向けて議論を重ねている。兵庫県市長会会長。

吉田雄人の会議メモ。

阪神大震災における自らの体験をもとに、有事の際の官民連携の大切さを知る。

黄金の72時間に何が出来るか（生存可能性のある時間）

行政はつねに被災者と同じ目線で取り組まなければならない。

所感

阪神大震災の際の体験談は、リアリティがあり大変参考になった。目の前で倒れている人々を横目に見て、涙を吞んで市役所に駆けつけて対応にあたったという話など、災害の現場についてイメージを喚起させられた。

【一般報告】：地域観光振興における期待されるホストとゲストの関係
佐藤 博康（さとう ひろやす） 経歴

千葉大学人文学部法経学科卒。特殊法人国際観光振興会勤務。日本各地の観光国際化推進事業、外国人旅行者受入体制整備、観光分野における国際協力などを担当。1995年より3年間文部省シカゴ国際交流ディレクターを勤めたあと、1998年静岡精華短期大学国際文化学科助教授。2003年4月より松本大学総合経営学部教授、松本市観光アドバイザー。論文・著作等に『日本型エコツーリズムの可能性』、『信州の観光資源とエコツーリズム』など。

吉田雄人の会議メモ。

ホストの精神とは、過去から遺産をつなげることだけではなくて、将来の子供たちから借りているという観点に立つこと。

地域社会と観光産業と環境保護団体が、反目する関係から連携する関係へと変遷し始めている。

エコツーリズムやグリーンツーリズムの流行の背景には、楽園願望が存在する。老人の間でウォーキングがはやるのも、町並みに「何か」を求めているからである。

「刺激」から「感激」へ、「展示型」から「生態系型」へ。

住民参加は「仕掛け」と「仕組み」が大切。

所感

大変造詣の深い話であり、「町おこし」を戦略的・計画的に行うための現代的な課題と能性を指し示していただいた。

私も思わず興奮して、質問をした。

「横須賀のまちのような新しく開発された『近郊』都市は、どのような町おこしが選択肢として考えられるか」

この問いにまず「横須賀はその名前だけでブランド足りえる」という答えがあった。これには、参加していた本市議会議員の面々も驚いていた。

その上で「ただ本当に『近郊』と呼ぶ都市では、観光産業は難しい。一つの自治体で点として考えるよりも、広域・複数自治体で面として考えていくしかないのでは」という答えを頂いた。

本市もたくさんの観光資源を抱えている町であるが、外から見る本市と我々のみる本市のイメージはかなり乖離したものであると言う認識に立つことが出来た。

<10月31日>

パネルディスカッション

【コーディネーター】 平野 啓子（ひらの けいこ）

早稲田大学在学中にミス東京。「NHK ニュースおはよう日本」元キャスター。語り芸術家として舞台やテレビで活躍中。語りの世界に新境地を開き高い評価を得ている。

【パネリスト】 清水 忠男（しみず ただお）

クランブルック美術大学院修士課程終了、博士（工学・東京大学）。ワシントン大学美術学部助教授を経て、現在、千葉大学工学部デザイン工学科教授。

【パネリスト】 卯月 盛夫（うづき もりお）

早稲田大学建築学科卒、同大学院修士課程修了。ドイツのシュトゥットガルト大学大学院博士課程留学。帰国後、世田谷区都市デザイン室主任研究員、世田谷まちづくりセンター所長を経て、現在、早稲田大学教授。

【パネリスト】 P・D・ピーターセン

コペンハーゲン大学文化人類学部卒業。語学教師、通訳・翻訳家、コンサルタント、MX テレビ・ニュースキャスター等を経て、平成12年「株式会社イースクエア」を設立。現在、代表取締役社長に就任。

【パネリスト】 清水 茜（しみず あかね）

慶應義塾大学総合政策学部卒業。株式会社イトーキ入社。現在、同社ユーデコ研究所（ユニバーサルデザイン&エコロジーの意）ユニバーサルデザイン室勤務。

【パネリスト】 清原 慶子（きよはら けいこ）

慶應義塾大学法学部卒業。同大学院社会学研究科博士課程修了。ルーテル学院大学文学部教授、東京工科大学メディア学部長等を経て、平成15年4月から三鷹市長に就任、現在に至る。

【パネリスト】 小笠原 臣也（おがさわら しんや）

中央大学法学部卒業。自治庁入庁。松山市助役、自治省選挙部長、広島県副知事等を経て、平成5年から呉市長に就任、現在に至る。

所感

・パネルディスカッション全体に関して

コーディネーターが、全く議論をコーディネートできていなかった。人選については、大きな誤りであった。このコーディネーターのおかげで、清水（忠）さんや卯月さんの存在が霞んでしまった。本来であれば、議論の土台となる「ケース」や「データ」を持ってきていたのはこの二人のみであったから、そこを中心に話をするべきであった。

また、三鷹・呉の両市長も与えられた役割を果たさなかった。特に、清原さんはご自分の施政方針をとうとうと述べるだけで、議論をしようとする気すら感じられなかった。小笠原さんは話せる人のようだったがコーディネートがうまくいかなかったため、活かされずに終わった。

清水(茜)さんに関しては、造詣が左程深くないわりには専門的な話をさせられてしまったため、せっかくの体験談などを強調できなかったのではないだろうか。

ピーターセンさんは、場の流れを読んだ話をされていた。一番有効な発言をされていた。

・ 個別的な話について

一番印象に残ったことは、「都市の美しさはその都市に住む人の美しさ以上にはならない」(卯月さん)という言葉である。そしてさらに卯月さんはこの言葉を「美しさ」から「優しさ」に変えて読むことができるのではないかと提言された。ここで言う「優しさ」とはおそらく、「癒し」の感情ではなく「元気」の源となりうるようなポジティブな感覚である。

この言葉を前提とした上で、次の言葉も貴重な意義を持つ。「マナーの悪さや思いやりの低さを批判する前に、ポジティブな政策を打ち出すべきである」(ピーターセン)。同様に清水(忠)さんの「ユニバーサルデザインはコストとしてとらえてはいけない」という言葉も光ってくる。

「優しさ」とは、具体的な政策に初めて宿るものであり、ユニバーサルとは生産性を向上させる一つの哲学であるということである。

また清水(茜)さんご自身の体験から、障がいを持つ方に「大丈夫ですか?」と声をかけるのは、大変失礼であることを学んだ。「大丈夫ですか?」と聞かれたら、たしかに誰でも「大丈夫です」と答えてしまう。そうではなくて「何か出来ることはありますか?」と問いかけることのほうがよい、ということだった。